

感性や創造力を生み出す 教育の実践

— つるびか団子から親子フェスティバルまで



竹井 史 (たけい ひとし)

大阪府出身
1985年 琉球大学教育学部を卒業
1987年 神戸大学大学院教育学研究科修士課程修了
1990年 美作女子大学 (現美作大学) 講師、1993年 同助教授
1995年 富山大学教育学部助教授
著書に『伝承おもしろおもちゃ事典』『自然素材を生かした造形活動』『不定形木片で遊ぼう』『幼児とつくるエコロジカル工作76』(以上、明治図書刊) など多数。
専門は美術教育・子どもの遊び

これからの大学において、“地域社会との連携を深め、貢献する大学づくり”と、“現代の教育ニーズに応える力量を備えた教員養成”が重要なテーマとなっています。富山大学でも、全国有数といわれる恵まれた自然環境を人間形成に生かそうと、多くの教育プログラムが作られています。多様な自然素材を利用した教育教材の開発も、その一例です。今回は、親子対象の遊びを核とした体験型事業を実践してきた竹井史助教授と、いつも遊び心でいっぱい相本芳彦アナウンサーの対談を通して、学生教育を生かした大学の社会貢献の可能性について考えます。

つるびか団子& アースケーキで自然と対話

相本 おおっ！ これが、かの有名なつるびか団子ですか！ 実物を見たのは初めてです。

竹井 プームになったのは、四年前にNHKの「人間ドキュメント」という番組で全国放送されたのがきっかけですが、昔からあったものです。私は二〇年近く前から子どもたちと一緒に作っています。

相本 写真で見たときはヒスイの球かと思いました。泥だけでできているとは信じられないような輝きですが、作り方を簡単に教えてください。

竹井 まず砂まじりの泥土で芯を作り、団子状に丸めていきます。つるつるした状態になったら細かい粘土状の粉を振りかけて、さらにつるつるにします。粘土の粉が土団子の表面を滑り落ちるようになったら、白くなった状態で少し置いて



相本 芳彦 (あいもと よしひこ)

高岡市出身
1979年 慶應義塾大学を卒業後、北日本放送㈱に入社
2000年 報道制作局制作部長に就任

おきます。やがて団子の内側から水分が出てきて、うっすらと色付いてきます。それを外に出すと粘土が縮もうとしますから、それにあわせてジャージヤストッキングのように水分を吸わない布でできると、うまくいくと一五分ぐらいで光ってきます。

相本 どんな土でもできますか？ 富山の土はどうでしょう。

竹井 つるびか団子の表面には直径二ミクロン以下の粘土粒子が必要で、ちょうど煙草の煙の粒子と同じくらいの細かさです。ところが富山県は降雨量が多いせいか、幼稚園の園庭や校庭には粒子が粗く、水はけのよい砂土が採用されているのが一般的です。これは粒子の大きさでいうと約一〇ミクロンですから、いくら頑張ってもつるびか団子ができない環境です。豊かな自然環境にいる子どもたちが必ずしも真の自然と出会っているわけではないのです。

相本 学校などの教材用の粘土はどうですか？

竹井 教材によく使われているのは油粘土で、人間が作り出した合成物です。いつもやわらかく、思い通りの造形が可能です。人間のわがままを聞き入れてくれますが、自然との関わり方を教えてはくれませんが、でも、土粘土は違います。水分が少なくなると乾燥してひび割れし、逆に水分が多すぎるとびちゃびちゃになって非常に扱いにくい。何か作ろうと思ったとき、土に寄り添い、土の性質や特徴を理解しようとする姿勢が求められます。そこには子どもと粘土とのインタラティブな(双方向の)関係があり、そう



いう意味では、土粘土との関わりはすぐれてエコロジカルなものです。

相本 大人がやっても上手に作れるとは限りませんね。

竹井 そういう体験を積み上げているかどうかです。大人よりも、むしろ子どもたちが自然の声をよく聞いている場合もありますから。つるびか団子は子どもが対象のせいか低くみられがちですが、決してそんなことはありません。

相本 私が子どもの頃は、泥水をコーヒールに見立てて遊んでいました。

竹井 泥遊びは、土や粘土の気持ちになつて自然と深く関わるなかでどんどん多彩になっていきます。

相本 泥遊びの延長線上にあるのが、アースケーキですね。

竹井 生クリームの部分はレモン石けんを削って水を加えて作りますが、見るからにおいしそうでしょう。

相本 レストランで出されても本物と見分けがつかないかもしれません(笑)。

竹井 造形的な面白さを演出する泡は水の量が重要で、季節の植物をトッピングするのがポイントです。トッピング用の植物をあちこち探すなかで、自然との出会いが生まれるわけです。

相本 そこに教育的な仕掛けが必要になってくるんですね。

竹井 アースケーキを勧めている理由が、もう一つあります。土も植物も自然のものですし、石けんも最終的には殆ど水と炭酸ガスに分解されます。自然のなかから恵みをもたらす文化的・芸術的価値を創りあげ、遊び終わったら自然に還っていくという意味で、リサイクル的な視点を備えた二一世紀型の教材だと考えています。

本質に触れる喜びが、眠っていた感性を呼び覚ます

相本 うちの子どもたちは小さい頃、近所の造形教室に通っていたんですが、そこでの様子はTVゲームをやっているとき以上に楽しそうでした。

竹井 与えられたプログラムに合わせてパーチャルの世界で遊ぶTVゲームと、五感をベースにした素材体験を通して自己の思いを形にいく自己表現との違いでしょう。そうやって培われた体験がエネルギーとなり、自分なりのアイデアをもって社会に踏み出していくことができるのです。自分自身で意味や価値を創りあげていけるアートは現代社会において重要な意味をもっていると思います。



相本 井波での先生の活動は、『不定形木片で遊ぶ』という一冊の本になっていますが、ここで使われている木片は、言い換えればただの木屑ですね。

竹井 井波といえば欄間が有名ですが、欄間制作のプロセスで排出される不材を私は「不定形木片」と命名しました。従来は業者に頼んで焼却処分されていた端材ですが、檜、アガチス、楠等の良木が多いので教材として再利用できないかと考え、町の保育士会と一緒に教材開発したのです。

相本 単なる木片でも、子どもは大人が予想もしないものに見立てたりしますから。

竹井 木片は何ものでもないけれど、子どもの想像力によって何ものにもなり得ます。木片を何かに見立てたり、組み合わせさせて一つの意味を作っていくなかで遊びが実現します。つまり、不定形木片には子どもたちが本来もっている遊びの機能を回復させるという効果も期待でき

ます。実際、子どもたちは半年から一年ぐらいいいかわかっている。でも、いろんなものに見立てるうちに、現代人が失いがちな想像力がよみがえってきます。

相本 子どもたちには、自ら創る力がちゃんと備わっているんです。

竹井 遊びの概念がどんどん狭まってきて、ゲームのようには何か遊び道具がないと遊べなくなりましたが、それ以前は広い遊びの世界があったはず。



相本 私も番組のなかで、主に若い人を対象に、「富山にどんなものがあつたらいいですか？」という質問を一五年以上続けてきましたが、「デイズニールランドがあつたら楽しい」という答えが一番多いのです。これにはすごく違和感がある、お膳立てされたシステムやアミューズメント施設がないと遊べないのかと

ことで、念願の万人規模の企画も夢ではありません。地域の方々にも加わってもらい、新生富山大学の知識、財産を皆さんにもっと生かしていただけたらと考えています。

相本 子どもの学力低下が懸念されていますが、創造力を養う場は得がたいものですね。

竹井 豊かな感性がベースにないと、本当の知性は身につかないといわれます。よく、「感性を豊かに」といいますが、豊かな知性を身につけるための前提条件として感性の大切さがクローズアップされています。感性は創造力を生み出す原動力であり、感性か知性か、という二者択一ではなく、両方が連動して豊かな知性がつくれるということを理解しながら子どもたちの成長に関わっていくことが必要だと思います。

相本 確かに、子どもって遊んでいるときに一番楽しそうですよね。竹井 遊びのなかで次々とイメージが広がっていきまますから。社会人になるための型にはめる教育によって、子どもたちが本来もっている創造力の豊かさがスポイルされてしまっている。一方では子どもたち一人ひとりの良さをいかに残していくか。矛盾するようですが、それが教育の世界では非常に大事になってきます。

相本 先生の胸の内には楽しい構想がいっぱい詰まっているんじゃないですか。竹井 エコロジカルな視点を具



竹井助教授の手にかかる、ストローや紙からも生命の息吹が伝わってくる



竹井助教授が名付け親となった謎の生命体「ヘコヘコ」。考案者は造形作家の水野政雄氏

残念に思います。

竹井 まさに、その通りです。デイズニールランドの良さは認めますが、遊びのなかの一つの領域ばかり大きくなくなってしまつと、成長に応じた本来の遊びが保証できなくなります。

相本 創造的な遊びを楽しめるのは何歳ぐらいまでですか？ 大学生になつてからでは遅すぎるような気がしますが。

竹井 そんなことはありません。私の授業では伝承おもちゃを取り上げています。たとえば紙飛行機を作る場合、理学部や工学部の学生たちは最初、紙飛行機なんてとバカにしています。ところが、ある程度の形はできて飛距離が五メートルや六メートルでは飛んでいることにならない。そこで現代の紙飛行機に流体力学が駆使されている話をすると、彼らも俄然本気になってきます。子ども時代に体験しなかつたことでも、大学生になつてから十分体験できればいいし、そういう体験を保証していかなければなりません。学生たちの眠っている感性をいかに引き出していくかが、私たちの仕事じゃないかと考えています。

親子フェスティバルを通して成長する学生たち

相本 富山大学主催の親子フェスティバルも既に六回目を数えましたね。

体化するとともに、紙やストローなど身近な材料の表現力、可能性をもつと伝えていきたいですね。たった一枚の紙でも、そのなかにある特性や可能性を具体化させたときに、すてきなおもちゃに変身します。原理はわからなくても、不思議だな、という感覚で原体験を積み重ねていくって欲しい。



相本 草笛なんかもそうですよね。実は私、ペットボトルを吹いて音を出せるんですよ。ほら、こんなふうに（プープー）。先生もやってみてください。

竹井 相本さん、うまいなあ。やつてみると意外に難しいですね。おもしろかったです（笑）。

相本 遊びのすばらしさは、やはり自分で体験しなければわかりませんね。今日は童心に返っておおいに楽しませてもらいました。テレビじゃないのが本当に残念です（笑）。



竹井 おかげさまで、昨年は七六〇〇名の参加がありました。全国的にも、これだけの規模でやっているものはないと自負しています。学生たちは半年以上前からプランニングに取りかかり、教材研究をして材料を調達し、制作し、さらには協賛依頼のためにあちこちを訪問して回ります。そうやって最初から後片付けまで一貫して担当することで、責任感が芽生えてきます。その価値はものすごく大きいと思います。

相本 これは文字通り、親子で参加することに意味があるんですね。

竹井 親子の新たな出会いをいかに組織するかが、目的の一つですから。最初はお互いにならなかつた親子が、ものづくりの過程で子どもの発想の豊かさが発揮されたり、家庭における親と子どもという固定化された関係を超えて夢中になつていくなかで、お互いに共通の言葉がそして笑顔が生まれてきます。

相本 うちの子どもが小学生のとき、小矢部市で開催された縄文フェスティバルというイベントに参加したことがありますが、勾玉づくりと火おこしに挑戦したのですが、勾玉づくりでは固定観念にとらわれない子どもの自由なセンスに新鮮な驚きを感じ、二人で三〇分もかけて全力投球で火をおこしたことが、すごくいい思い出として残っています。

対談を終えて…

コミュニケーションの基本は「相手の目線でものを見、語ること」とよく言われますが、実践はなかなか難しいものです。しかし竹井先生は最初から相手の内懐に入り、なおかつ子どもから大人まで爽快感さえ味わわせてしまつてお見事です。草笛ならぬ縦笛、身近なものを使った手品からつるびか団子までぐいぐいと先生の引力に引っぱられてしまいました。与えられた「遊び」が多い中で、創造する「遊び」がこれほど楽しいものであつたかと改めて思い知らされました。

次にお会いするまでに、わたしの「ペットボトル笛」の腕をもっと磨いておきましょう。（相本芳彦）

始発サンダーバードを飛び降り、大急ぎで富山大学へ。一〇分遅刻。息も絶え絶えに指定された場所に着くと、すでに相本さんの姿が。お待たせしてすみません（挨拶もままならないうちに、相本さんの鋭い視線は持参した小箱に向けられる。事前に「つるびか団子」をもつていくとお伝えしておいたからだ。泥団子にこんなに興味を持ってもらつた大人は相本さんが初めてじゃなからうか。そういえば、星の王子さまに似てるかも）何にも感性が開かれています。相本師匠、勝手ながらこれからはそう呼ばせてもらいますぜ！（竹井 史）



椿 範立 (つばきのりたつ)
Tsubaki Noritatsu

工学部物質生命システム工学科 応用化学第一講座 資源・エネルギー工学講座
1965年 8月生まれ
1995年 東京大学工学系研究科博士課程修了、工学博士
1995年 東京大学大学院工学系研究科助手、1998年 同講師、1999年 同助教授
1998年 社団法人石油学会野口記念奨励賞、2000年 社団法人日本エネルギー学会進歩賞
2001年 富山大学工学部教授
専門：触媒化学、化学工学、エネルギー工学

エネルギーおよび環境問題の同時解決を目指す

スーパークリーン液体燃料の合成技術

日本におけるエネルギー・環境問題

人口の増加と生活の質の向上に伴い、エネルギー消費は年々増大している。しかしエネルギーの主力である石油の埋蔵量はあと40年分しかない。エネルギー消費の六七割を石油輸入にたよる資源小国日本は、石油代替燃料開発の重要性を早い段階で認識し、技術開発に資金と人力を投入してきた。しかし石炭の直接液化技術に集中し過ぎて、投入されてきた数千億円の税金の成果はほとんどゼロとなった。

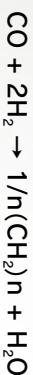
石炭は産地により、約二〜三%の硫黄を含んでいるため、石炭の直接液化油の硫黄濃度がかかなり高いという問題がある。硫黄分を含む燃料を燃焼させるとSOxが発生し、健康被害が大きい。そのため、サルファーフリー(硫黄分を含まない)の燃料が望まれている。日本国内では現在、ガソリンには硫黄分が50ppm(1ppmは百万分の一)、軽油には500ppm含まれているが、更なる硫黄分の低減が求められており、すでにサルファーフリー燃料として、硫黄分10ppmのガソリンが一部で市販されている。

従来のガソリンエンジン、ディーゼルエンジンは必ず健康被害につながる排気ガスを出すことから、排気ガスを出さない将来の新しいエネルギー源として燃料電池が期待されている。燃料は水素と酸素であるため、排出されるのは水のみである。自動車に燃料電池を搭載すれば、有害な排気ガス

その核である。ここではFT合成による液体燃料の製造について述べてみたい。

FT合成

FT合成反応は一酸化炭素と水素から次式によって炭化水素混合物を与える反応であり、激しい発熱反応である。



触媒としては金属状態の鉄、コバルトおよびルテニウムが高活性を示す。反応温度は200〜350℃、反応圧力は常圧〜四〇気圧程度である。生成する炭化水素は、炭素数一から一〇〇程度までに幅広く分布する直鎖炭化水素である。日本では国家プロジェクトとして石油公団と企業六社は筆者の触媒技術に基づいて北海道苫小牧市勇払でパイロットプラント研究を行っている。富山大学においても、筆者のグループ・新日鐵とプロジェクトを組み、二〇〇三年一月から地域共同研究センターに、ベンチプラントを作り、軽油の生成研究に関するFT合成研究を行っている。(図3)

バイモダル触媒の開発

高性能FT触媒

FT反応(スラー相)は微細な固体触媒を高沸点溶媒(高分子量のパラフィンなど)に分散して反応を行う。スラー相の反応は、反応熱の除去が速く、触媒上で蓄積したワックスが溶媒によって抽出されるため、触媒寿命が長い。しかし、液体中におけるガスの拡散速度が遅いため、反応が拡散律速になりやすい。一方、触媒粒子内に

を出さないため、世界中の自動車会社で開発が行われている。水素は、ガソリン、軽油、メタノール等の液体燃料を改質し、製造することが考えられている。燃料電池には白金製電極が使われているが、硫黄に被毒されやすいため、硫黄分が0.01ppmの液体燃料が必要である。しかし、硫黄分の濃度を下げるための、製油所の燃料油脱硫装置における水素圧の増加、触媒と吸着剤コスト、プロセス運転上の制限など考えると、将来においても0.01ppmは不可能に近い。

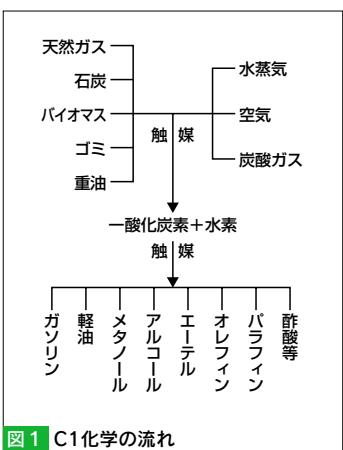


図1 C1化学の流れ



図2

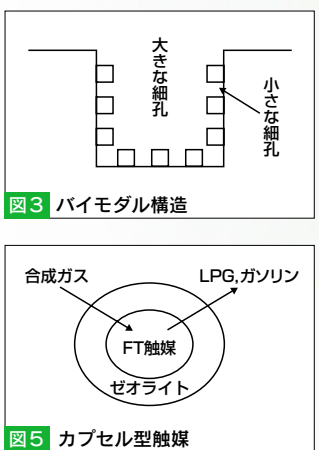


図3 バイモダル構造

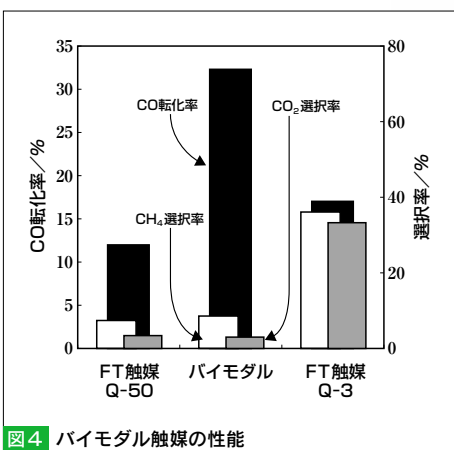


図4 バイモダル触媒の性能

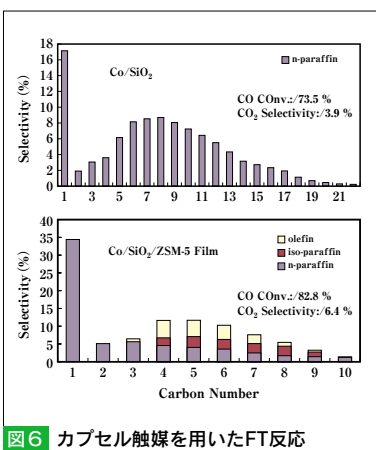


図6 カプセル触媒を用いたFT反応

において、水素の拡散速度が一酸化炭素の拡散速度より速いため、触媒内部でのCO/CO₂比が原料の比より高くなり、ワックスが生じにくくなる。これらの問題を解決する

スーパークリーン液体燃料

現在、液体燃料中のサルファー完全フリーの燃料問題を解決できるのはC1化学である。C1化学は炭素(C)原子を一つしか持たない化学品の化学である。C1化学の流れを図1に示す。天然ガスなど有機炭素資源を高温水蒸気等と反応させると、一酸化炭素と水素の混合ガス(合成ガスと言ふ)になる。ここで有機資源に含まれる厄介な硫黄、窒素分は硫化水素及びアンモニアのような無機ガスになる。これらの化合物は除去しやすく、完全に除去できる。硫黄分を含まない完全に純粋な合成ガスが簡単に得られるのはC1化学の最大のメリットであり、この合成ガスから各触媒を用いてガソリンなどの各製品を作るので、当然製品純度は抜群に高い。硫黄分、窒素分は全く含まれない。合成ガスから液体炭化水素を作る触媒反応(FT合成)では原理的に芳香族が全く生成しないので、芳香族の問題もクリアされる。プロセス的に見ると、どんな有機資源でも合成ガスになるので、工場一つで多様な原料に対応できる。C1化学の一つのルートはGTL(Gas to Liquid)で、これは天然ガスから合成ガスを經由して液体燃料あるいは化学品(炭化水素、アルコール、エーテル、酢酸など)を製造する技術である。液体炭化水素を作るFischer-Tropsch(FT)合成は

ため、原料ガスと生成油の触媒内での拡散速度の向上を目的に、大小二種類の細孔を有するバイモダルコバルト触媒を新規に開発した(図3)。大きな細孔はガスと生成物の拡散速度を向上させ、小さな細孔は活性金属の表面積を増加させる。図4に示すように、この触媒を用いることにより、FT反応の活性は大きく改善された。バイモダル触媒は多くの工業用触媒に応用が可能なため、その発展が期待される。

カプセル型触媒の開発

LPG、ガソリン製造

FT合成で生成されるのは直鎖炭化水素のみであり、セタン価が高いことから軽油としては問題ないが、オクタン価が低いため、ガソリンには不向きである。FT合成により、LPGもしくはガソリンとしてそのまま使える低級イソパラフィンの合成を目的として、FT合成触媒上にゼオライト被膜を作り、合成ガスからイソパラフィンを多く含むガソリンの生成に成功した。触媒構造を図5に示す。合成ガスはゼオライト被膜を通り、FT触媒上で直鎖炭化水素となり、ゼオライト被膜を通して触媒外に出るときに、異性化・水素化分解を受ける。図6に示すように通常のコバルトFT触媒では炭素数一六程度までの直鎖炭化水素が生成したが、カプセル触媒では炭素数一〇以上の炭化水素は生成せず、生成物もオクタン価の高い分枝炭化水素が多く生成した。今はまだ研究室段階の研究ではあるが、この触媒を用いて大型プラントでの試験研究を行い、この方法でLPG、ガソリン製造の実用化を行いたい。

「経験という宝物を手に入れた四年間」

たくさんの恩師との出会い

幼稚園から高校までの一五年間に、やさしさで包みこんで下さった先生、人として大切なことを教えて下さった先生、勉強の楽しさを教えて下さった先生などとの出会いがあり、私も人に何かを伝える仕事ができたらいいなあと思っていました。そんな私に、富山大学の幼稚園教員養成課程なら、小学校教員と幼稚園教員の二つの道が選べると、高校三年時の担任の先生が勧めて下さいました。それが受験のきっかけとなりました。



国内各地へ旅したサイクリング部の思い出

スや家庭教師のアルバイトもしました。特に印象深いのは、ひな人形の配達のパイト。地図を見ながら車を運転し、注文したお宅で飾りつけまでしてくるといふもので、冬の寒い中でしたが、配達先でお茶菓子をいただいたり、時にはご祝儀をいただいたりと、貧乏学生にとってはありがたく嬉しいパイトでした。

勉強でもスポーツでも、何でもいいと思います。失敗も楽しいことも、全て自分の血となり、肉となります。私は休みを利用して自宅近くの保育園で自主的に教育実習をさせて頂いたり、オーストラリアで一ヶ月ホームステイを体験したりしました。実際に見たり聞いたりして肌で感じたことが、その人を作ると思うので、ドンドンいろんな経験をしてほしいと思います。

人生を方向づけたキーワード

ある日の講義で、「人を木に例えると、幼児期は若芽の時期で、その若芽を太陽になり、雨になり、地の養分となって育むのが教育という仕事

事」というような話をお聞きしました。何かを教え込んだり、間違いを直したりするものが教育だと思っています。

私にはとても心があったかくなるお話でした。その時の涙が出そうになるくらい感激が、幼稚園教員を目指すきっかけになったように思います。

今は二児の母となり、自宅でエステティックサロンの仕事をさせて頂いています。お客様に喜んでいただけることがやりがいになっています。私は器用な方ではないので、ひとつのことをがんばって続けていくことで何らかの結果が出てくると信じ、「あきらめない心」をモットーに今の仕事を続けていきたいと思っています。そう思えるのも今までの経験があったからこそ、今まで接したすべての方々に感謝したいと思っています。

チャレンジ精神で様々な経験を積んで欲しいと語る佐伯氏

佐伯 恵子氏 (さえき けいこ)

- 1967年 高岡市生まれ
- 1989年 富山大学教育学部を卒業し、学校法人こぼと幼稚園に勤務
- 1993年 出産の為、退職
- 1995年 現(有)マジエンタにてエステティック研修を開始
- 1996年 エステスタジオ リーフィをオープン

日本エステティシャン協会認定エステティシャン
日本エステティック業協会認定フェイシャルエステティシャン



女子ソフトボール部

北信越大会二連覇を目指して



▲黒田教授(前列中央)と全国大会出場メンバー

クラブ紹介第三弾は、女子ソフトボール部です。

女子ソフトボール部は、部長(監督)である工学部黒田重靖教授の指導のもと、男子ソフトボール部のOBがコーチとなり、月・水・金・土の週四日、大学の第一グラウンドや五福公園を主体に活動しています。

八月の大会に出場後、主力であった三年生が引退したため、二年生が三人、一年生が六人の計九人で活動しています。そのうち半数が中学・高校時代からの経験者です。部員は大変明るく元気よく、部の目的である「明るく」、「楽しく」、「元氣」にソフトボールに取り組み」を実践しています。

活動状況と今後の課題

平成一六年四月に富山市で開催された第一回北信越大会では三位に終わりました。これをバネにチーム力の強化を図ったことで五月の長野県千曲市で開催された第一〇回北信越地区女子ソフトボール選手権大会では、七という接戦の末、決勝では八対七という接戦の末、金沢大学を下して優勝し、九回目となる全国大会への出場権を手に入れました。八月に静岡県富士宮市で行われた文部科学大臣杯第三九回全日本大学女子ソフト



ボール選手権大会では、二回戦からの出場でした。しかし、いつもの力を十分に発揮できず、残念ながら敗退しました。私たちは、この全国大会を経験して、全国大会で一勝することの難しさを知り、また、来年も全国大会に行きたいという思いがさらに強くなりました。

そして、九月に富山県立山町で行われた第一〇回北信越地区大学男子・女子新人ソフトボール大会は、新チームになって初めての公式戦でした。初めてながら、一年生の活躍もあって、健闘しましたが、結果は、三位という不本意なものでした。今後、さらなるチーム力アップと個人のレベルアップを課題として練習に取り組みしていくことにしています。

活動する上での心構え

現在、私たちは、九人で活動して

います。試合に出場できるぎりぎりの人数です。状況は大変厳しいですが、「北信越大会二連覇&全国大会で一勝！」という目標を掲げ、五月の北信越大会に向けて、日々練習に励んでいます。

また、これからも、私たちが日々支えてくださっている監督やコーチの方々、先輩方への感謝の気持ちを忘れず、頑張っていきたいと思っています。

黒田教授(部長・監督)から

ここ一〇年では男子、女子共に力をつけて、北信越地区を抜け出し、どちらかがインカレに出場しています。男女アベック出場が今年を含めて二回ありました。今年のインカレは世界選手権が行われた富士宮市のソフトボール球場でした。高橋主将のもと一丸となって戦いましたが、相手チームと力では大きな差があり、結果的には負けました。しかし、試合内容や選手の態度が好印象を観客の皆さんに与え、インカレの後、末井全日本大学連盟理事長から選手へのねぎらいの言葉を戴きました。

その後、新主将も決まり、新しいチームで今春の北信越地区選手権大会に向けて練習に励んでいます。一冬練習で頑張ると選手の力は見違えるように上達します。来年も選手には期待をしております。

今後とも女子ソフトボール部への御支援をお願い申し上げます。



『蝶のゆくえ』

著者：橋本 治
集英社刊 定価：本体 1600円+税

さしたる悪意はない。しかし、かといって人に対する配慮もない。状況全体を見通す理解力もない。日常の中ではごく普通にあるそういう風景の歯車がずれ始めると、予想もしない結末にたどり着くことがある。いや、もしかしたら、結末は予想可能で、運命づけられたものかもしれない。しかも、同じ風景でも見る人によって全く違って見えるものだ。

六つの短編からなるこの本の冒頭の作品「ふらんだ一すの犬」は、幼児虐待で命を落とす七歳の男の子を描いている。美加は十八で孝太郎を生むがすぐ離婚し、二十三で再婚する。しばらく祖母に預けられていた孝太郎は小学校入学を前に美加に引き取られるが、実の母とその再婚相手の虐待でほどなく殺されてしまう。

孝太郎が絶対に不幸かという、必ずしもそうは言えないことを表題の「ふらんだ一すの犬」が示している。確かに彼の目に映る風景は不幸そのものだったとは言えない。しかし、客観的に見てそれは、やはり、不幸だ。強くなければ生きていけない時代かもしれない。しかし、生まれながらにして強い人はいない。

実は読んでいて胸が張り裂けそうに幾度かあった。日常の風景にこそ、今の時代を、そして、今の日本を象徴するものがひそんでいる。橋本治のこの短編集は、文学と社会のあり方にかかわる一つのメッセージにも思われた。

(加藤重広)

経済学部 経営学科

真部研究室 原価計算論

Business Administration Department
Cost Accounting



▲真部研究室のゼミ風景(中央が真部先生)

未来の経営・会計スペシャリストを

真部先生の専門は原価計算論。現在の研究の課題は、旧来の原価計算の限界や問題点を分析し、それらを克服するために新たに登場した活動基準原価計算(Activity-Based Costing=ABC)の有効性を明らかにすること。さらに、企業がABCを導入する際に、どのようにしたら成功裏にABCを導入することができるかについて調査し、ABC導入の成否のメカニズムについて考えていくこと、らしい。

ゼミの学生は二年生七人の他、夜間生の三・四年生三人の計一〇人で、この中には税理士と経営コンサルタントを目指している学生が一人ずついるとのこと。ゼミでは必ず一人一回は質問をさせるようにしているとのこと。学習意欲の高い学生を待ち望んでいるのはどこも同じである。日商の簿記検定一級を目指す学生や公認会計士を目指す諸君は、原価計算および管理会計を修得しておかなければならない。ABCを学ぶためのABCから挑戦してみよう。あの京セラの稲盛和夫を目指して、実学を実行しよう！

富大の学生は真面目であるが、少しおとなしいところがあるので、もっと闊達になって欲しい。真部ゼミでは春夏の年二回合宿を考えている。「みっちり学んでしっかり遊ぼう！」を合い言葉に、将来、経営者、経営コンサルタント、税理士等を目指す学生諸君の研究室入りを歓迎したいと、真部先生は今日も楽しくゼミをやっている。

(高井正三)

次世代技術と人材の育成

工学部物質生命システム工学科生命工学講座・篠原寛明教授の研究室では、生体系(バイオ)と電子システム(エレクトロニクス)をつなぐ、バイオ・エレクトロニクス・インターフェイスの開発を目指して研究を行っている。

その具体的研究テーマとして、例えば、半導体デバイスを用いて見つけたい遺伝子を迅速かつ高感度に検出するバイオセンサの開発を行っている。また、日本経済新聞でも紹介された。また、神経細胞の興奮応答を簡便に観察する新手法の開発やその細胞チップへの応用といった研究を継続中である。さらに、自然界に存在しない有用なアミノ酸を合成し、それを組み込んだ人工蛋白質を創り、病原菌や環境汚染物質等をより容易に検出するバイオセンサ等への応用を研究している。

これらの研究は、新大学における医薬理工の融合により、学際的研究として花開く可能性を秘めていると言える。

研究室には産学官連携研究員と博士課程の特別研究生が在籍し、四年生の卒業研究や三年生の実習をリードしている。学生とのディスカッションが大切という篠原先生の夢は、生命科学にもエレクトロニクスにも精通したエンジニアを育成して社会に送り出すことだ。地域社会へ貢献し、新しい研究の地平を切り開くことが重要なのだと熱のこもった口調で話された。

(河野三郎)



工学部 物質生命システム工学科 生命工学講座

細胞機能工学研究室

Cell Engineering Laboratory / Bioengineering

◀データ解析を指導する篠原先生(左から二人目)

本書は地域の文化空間から鷗外文学を論じたものである。出版にあたり、新聞での連載や雑誌掲載論文を基に、森茉莉、永井荷風、ベルツ、コッホなど内外の鷗外と関わる人物との交流について新たに書き下ろした全十一章を加え、二十九章からなる。第一部では、題名ともなっている「鷗外と神奈川」の視点から具体的に読み解いた。第二部は作品論であり、巻末には年譜も付した。

鷗外と神奈川のかかりはあまり知られていないが、横浜市歌や横浜商業高校の校歌を作詞するなど深いつながりがある。西洋への玄関口となっていた横浜港は、日本に追ってきたドイツ女性との永遠の別れとなった地でもある。「舞姫」と横浜、「青年」と箱根、歴史上の人物を現代語で書いた初の戯曲「静」や「日蓮上人伝説」と鎌倉、旧劇を現代によみがえらせた「曾我兄弟」と小田原など、地域とのかかわりから鷗外文学の新たな魅力を引き出せるようにした。

鷗外は富山出身で女性文芸誌「番紅花」を創刊する尾竹紅吉や「青鞥」の平塚らいてう等女性たちの運動を応援し、歴史小説のヒロイン像への反映も見られる。こうした同時代の女性たちや作家との交流を通して鷗外の生きた時代と作品を浮き彫りにした。実証面では、筑摩文庫の「青年」の注釈の間違いをただすなどの新たな発見もある。

本書は筆者の二冊目の鷗外研究書であり、先の「鷗外と女性」(天東出版社)と合わせ、少しでも鷗外への探求が広がればと思う。

(金子幸代)



『鷗外と神奈川』

著者：金子幸代 富山大学人文学部教授
神奈川新聞社刊 定価：本体 1500円+税



父から子へとコリヤーク語が受け継がれることはない

変える出世魚がある。魚という自然資源はまさに我々日本人が集中的に適応対処すべき文化的重点領域であり、そのことが語彙の細分化を促している。かたや、中央ユーラシアの内陸の乾燥地帯に分布するモンゴル語は魚に関する語彙が極端に乏しい。しかし、モンゴル語には、羊・山羊・牛・馬・駱駝の五畜をめぐる絢爛豪華な語彙がある。ここにあるのは、優劣ではなく「違い」だけである。

消えゆく言語、コリヤーク語を対象として

私がここ一〇年間取り組んできたシベリア極東、カムチャツカ半島北部を中心に話されている言語、コリヤーク語は子供たちがもはや母語として学ばなくなった、先の分類によれば「絶滅寸前」の言語である。その衰退は私がツンドラでトナカイ遊牧を営むコリヤークのもとに通い続けたこの一〇年の間に、シベリアというところで進んでいる。酷寒といったイメージがつきまとうが、実際には、家畜トナカイ、ツンドラを縦横に走る大川の魚、森林の野生動物など動物資源にも恵まれている。ベリヤ球根などの植物資源も豊富に生育する。コリヤークはこれらの資源を巧みに組み合わせ利用することにより、過酷な自然を生き抜いてきた。そのことが、自然資源を満遍なく表わす豊かな語彙にも反映されている。



第13トナカイ遊牧プリガードにて

もちろん、単に言語がたくさんあるだけではない。豊かな語彙の背景には、自然資源に対するきめこまやかな観察の跡が読み取れる。その一例が家畜トナカイ名称。ここでは生殖可能性が語彙分節の重要な基準となる。〇歳がオスメスにかかわらず同一名称であるのはまだ生殖可能年齢に達していないこと、オスは四歳になると「本当の」という修飾成分を取り、初めて生殖可能な成畜として認められること、メスにオスほど細かい名称の区別が施されていないのは、一歳ですでに生殖可能となり、死ぬまで毎年同じように出産を繰り返すことが関係していることなど、語彙をとおして家畜トナカイの生態とこれに対するコリヤークの認識のあり

ようが浮かび上がってくる。もちろん、コリヤーク語にはコンピユータを表わす単語も電話を表わす単語もない。なぜなら、それらはツンドラでは無用の長物だからだ。その代わりに、ツンドラで生きていくために必要な語彙は先の例を見るまでもなく十二分に揃っている。政治とか経済とかといったおおよそ言語そのものとは無関係な価値観から解き放された者にとつてそれは、コリヤーク固有の環境への適応戦略に関する知識や情報だけではなく、人の普遍的経験に対する解釈さえをも詰め込んだ宝箱なのである。ここにこそ私たちが、今、環境に優しい言語学の道を模索する所以がある。



呉人 恵

Kurebito Megumi (くれびと めぐみ)

人文学部 人文学科 行動文化講座 言語学コース
 1957年 2月生まれ
 1979年 3月 東京外国語大学外国語学部モンゴル語科卒業
 1985年 3月 東京外国語大学大学院外国語学専攻(モンゴル語学)修了(文学修士)
 1989年12月 北海道大学文学部言語学講座助手
 1994年11月 富山大学人文学部助教授
 2003年 5月 富山大学人文学部教授
 専門分野: 言語学・コリヤーク語学

環境に優しい言語学

—なぜ消えゆく言語に取り組むのか—

世界の言語は今

授業の冒頭によく学生にする質問がある。「ことばの働きってなんだと思う?」これにはほぼ例外なく、「意思の伝達!」という確信に満ちた答えがかえってくる。しかし、この確信が実は世界中で進んでいる言語の急速な衰退の一因になっているかもしれない。

現在、世界で話されている言語は、六〇〇とも七〇〇ともいわれているがM・クラウス博士(元アラスカ大学)は、このうちの九〇%が今世紀中に消滅に向かうであろうと予測している。博士は言語をその危機度により、①子供がすでに母語として習得しなくなった「絶滅寸前」の言語、②子供が母語として習得してはいるが、今世紀末までに①になる可能性がある「消滅の危機に瀕した」言語、③将来も確実に話され続けるであろう「安泰な」言語の三つに分類している。博士によれば、①は二〇~五〇%、②は四〇~七〇%。一方、③はわずかに五~一〇%にすぎない。



世界の言語と語系の分布 [新報社刊「消えゆく言語たち」より]

世界の言語地図は、話者数数億を擁する少数の大言語で塗りこめられた世界に、話者数の少ない小規模な言語が夜空の星のごとくちりばめられているようなものである。そのうえ、この小

さな言語たちは加速度的に大言語に飲み込まれ、永遠に消え果てていく。これは、グローバルゼイションという華やかな世界の舞台裏で起こっている見逃せないできごとだ。

道具視が招く

汎用性重視の言語観

言語にはたしかに、意思の伝達の「道具」としての働きがある。ところがこの言語の「道具視」は、一方で、道具は少なければ少ないほど便利だという考え、言い換えれば、汎用性を重視した言語観にもつながる。たとえば、用途に応じたさまざまな包丁が、三徳包丁一本になり果てている日本の一般家庭の台所を思い出せばよい。肉も切れば野菜も切る、魚もおろせば面取りもする、ひとつですべての用を足す包丁は便利で安上がりだ。政治的・経済的に優勢で民族の違いを越えて広範囲に用いられる大言語は三徳包丁、限られた用途と地域にしか用いられない小言語は、



少女はもうコリヤーク語が話せない

文化を映す鏡としての言語

しかし、言語にはもともとと根源的な働きがあるはずだ。環境を認識しこれに適応対処していく人の営みを文化とするなら、文化は言語のすみずみまで浸透している。人が環境をどのように認識し範疇化しているかは、時に語彙として、時に文法として言語に炙りだされる。周りを海に囲まれた日本には、成長段階に応じ、名称を豊かに

アメリカにおける インクルーシブ教育

水内 豊和 (みずうち とよかず)

教育学部講師 専門分野：障害児教育学



本人の学習や発達を促すだけでなく生活の質を高めるといふ価値を研究として客観的に実証していくところ。そしてもう一つは、インクルーシブな教育には方法論があるということ。これらの点は、米国の研究者や様々な国の大学院留学生、そして障害者本人と夜遅くまで議論した中で、「日本の状況はどうか？」と聞かれ、返事に窮したこともありません。

二〇〇四年一月一七日から二三日まで、アメリカのネバダ州リノに行ってきました。目的は障害者に関する国際学会(IASH)への参加と、今後の共同研究に向けた米国の研究者との打ち合わせです。

さて今年の学会テーマは「生涯にわたるインクルーシブ教育」でした。ここでは、障害児・健常児という区分けを前提とした「統合教育(Integration)」ではなく、障害を含めた多様性を「包摂する(Inclusive)教育」に関する研究報告が、研究者、教師、親、そして障害者本人から多数なされていきました。内容も、幼稚園において社会性や友情を育むプログラムから、青年期に地域で余暇生活を楽しめるような支援のありかたまで実に様々。

研究者、障害のある学会発表者、日本人留学生とともに(右から2番目が著者)

そのような中、日本の状況と大きく異なると実感したことを二つ。一つはインクルーシブな教育が障害児

本人の学習や発達を促すだけでなく生活の質を高めるといふ価値を研究として客観的に実証していくところ。そしてもう一つは、インクルーシブな教育には方法論があるということ。これらの点は、米国の研究者や様々な国の大学院留学生、そして障害者本人と夜遅くまで議論した中で、「日本の状況はどうか？」と聞かれ、返事に窮したこともありません。

我が国でも特殊教育から特別支援教育への転換が進む中、障害児が通常学級に在籍することはめずらしいことではなくなるでしょう。国情の違いから、インクルーシブな教育の実施に際しては、そのまま米国のシステムを参考するわけにはいかないでしょう。しかしその成功は単に理念の先導ではなく、いかに「価値体系」と「実践方法」を構築していくにかかっていると感じました。

Topic

特別講演会

「国立大学の法人化と大学運営」を開催

二月一四日(火)の午後、黒田講堂において、東京大学理事・副学長 林 良博氏を講師に迎え、「国立大学



の法人化と大学運営」と題した特別講演会を開催しました。

同講演会は、昨年四月、国立大学法人法により、国立大学の法人化を迎えて半年余りが経過し、大学間の競争が増す中、平成一七年一〇月の富山県内三大学の統合を前に、法人化及び統合によるメリットを生かしてどう発展させていくか、いかに運営基盤強化を図るか等々の課題について改めて各職員に考えてもらう機会にと企画されたものです。

林氏は、国立大学協会会長を務める東京大学佐々木学長のもとで理事・副学長として東京大学の運営に携わり、大学の法人化問題では文部科

学省や各大学の状況にも詳しい情報をお持ちで、今回講演をお願いしたものです。同氏は、富山県立高岡高等学校出身で、「富山には親しみを持っている」ということでお引き受けいただきました。

講演会では、法人化によって国立大学はどのように変わったか。二一世紀の大学に求められる機能・役割は何かについて、また、最近の国立大学関連予算等の動向と不足する運営資金への対応など、法人化後の大学運営の課題について、体験談や東大大学の事例(アイデア)紹介などを交えながら話されました。



講演会には、一七年一〇月に県内三大学の統合を控えていることから富山大学のほか富山医科薬科大学と高岡短期大学からも参加があり、約二〇〇人の教職員は熱心に耳を傾けていました。

学内探訪

「魚津海底(埋没)林の樹根」(理学部一号館中庭)



魚津海底「埋没」林の樹根とその説明文

理学部一号館中庭に

魚津海底「埋没」林の大きな樹根が保存・展示されている。本学名誉教授の藤井昭二先生にその由来をお聞きした。

先生によると、一九三〇年魚津漁港改修の際に大量の大きな樹根が発掘された。それを研究された旧制富山高等学校の石井逸太郎教授と旧制魚津中学校の山家元治教授は、地盤沈下を示す貴重な資料とされた。この樹根の一部は工事事務所の好意で魚津から旧制富山高等学校のあった蓮町まで、船とトラックで運ばれ、正門の脇に保管された。蓮町から現在の五福キャンパスへはダンプカーで運ばれたという。

魚津の埋没林博物館の樹根はこれと同じくスギで、それらの放射性炭素年代は二〇〇〇〜一五〇〇年前の間を示している。

一九五五年に国宝相当の特別天然記念物に指定されている。一九八九年に道路敷設の可否を決めるため再発掘が行われ、新しい分析方法で多くの新事実が分かった。

一九六五年藤井先生が、富山湾周辺の海底林や泥炭層を調べ、この成因は地盤沈下ではなく、海面変化によるものと発表したところ、地元の人々は「埋没林」の年代が一万年より古いと信じていたので、それが五分の一より若くなったことや、特別天然記念物の指定理由が、変更により「国宝」の指定が取り消されるのではないかと心配から、長年この考えを無視する態度をとっていたという(麻柄「埋没林のはなし」)。ただし、未だ地盤沈下説か海面変化説かを示す根拠が明らかではないと、理学部の説明文に記されている。

近年、環境のことがいろいろ議論されるに至って、ただ大きな樹根があると感心するだけでなく、塩分を嫌い、風による倒木を防ぐため、直根性のスギの根が盤根錯節しているのはなぜか。何故海底にあり、当時の海面がどうなっていたのかを考えて欲しい。また、温暖化すると海面がどのようになるか、海底林の語ることに耳を貸して欲しい。と海底「埋没林」は今も私たちに問い続けている。

参考文献

- ① 藤井昭二・麻柄一志他、「魚津埋没林とその成因」、金沢大学日本海域研究報告三四、二〇〇三
- ② 麻柄一志「埋没林のはなし」、魚津埋没林博物館、一九九二

読者からの声

Reader's Voice

◆興味を持って読ませてもらう。広報紙を通じて大学の動きがよくわかる。(東京杉並区 K・T)

◆14号で取り上げられた太陽光発電システム、確かに地球規模からみると小さいかもしれないが、環境問題やエネルギー資源の枯渇問題など多くのことを考えさせてくれた。(神戸市 S・T)

◆海底に湧き出る「泉」。地元だからそういう話は知っていたが、ああそうなんだ、と改めて教えてもらった。他の富山湾の不思議についても取り上げてほしい。(富山市 M・K)

◆職場で活用できるのではないかと「子どもいきいき支援ツール」早速購入しました。取り組みや支援ツールの活用について我が職場ではどうかと話し合っています。(黒部市 K・I)

読者の皆様ありがとうございます。第16号についても是非ご意見・ご感想をお寄せください。

また、こんな研究はやってないのか?とか、こんなテーマを取り上げて!というご要望をお待ちしています。(編集PJ事務局)

編集後記

新しい年を迎えて

まとまった量の雪も降り、寒さの厳しい冬の季節を感じる毎日となった。新しい年を迎え、前年を振り返ってみると、震災、台風、津波などの大災害が報じられた一年だった。被災地に生きる人々にとって厳しい冬となっていることを思いつつ、早期の復興を願うばかりである。

さて、本年は富山県内の3国立大学の統合が予定され、着々とその準備が進んでいるようだ。難しいことも多々あるだろうが、新・富山大学が文字通り「大学改革」によってよりよい教育・研究環境が整備されることを期待したい。

そうした改革が進む一方、「TOM'S」の編集・発行も、「改革」状況を地域社会に発信する広報として、その役割はいっそう重要なものとなってくるだろう。まだ編集委員になって間もない私だが、他のスタッフの助けによって、どうかこの文章を書いている。次号もまた充実した誌面づくりを目指したいと考えている。(M・N)



TOM'S Magazine

富山大学広報誌 TOM'S トムズマガジン 16号

発行日 平成17年1月31日 発行 国立大学法人富山大学 ●問合せ先：富山大学総務課広報室 〒930-8585 富山市五福3190 TEL 076-445-6027 FAX 076-445-6033 E-mail: kouhou@adm.toyama-u.ac.jp ■トムズマガジンはインターネットでもご覧いただけます。http://www.toyama-u.ac.jp/jp/ 印刷製本株式会社ニッポン

研究紹介 **スーパーパークリオン液体燃料の合成技術**
 大学人物ファイル No.10 **佐伯恵子氏**
 クラブ紹介 **女子ソフトボール部**
 研究室への招待
 BOOK REVIEW 「蝶のゆくえ」「鵜外と神奈川」
 カイセツの鉄人 **環境に優しい言語学** —なぜ消えゆく言語に取り組むのか—
 TOM'S Essay / 社内探訪 魚津海底(埋没)林の樹根
 トピックス **国立大学の法人化と大学運営**



特集・対談
感性や創造力を生み出す教育の実践
 竹井史 富山大学助教
 相本芳彦 KNBアナウンサー

No.16 Winter 2005

雪のキャンパス

◆大学の動き

富山大学大学院理工学研究科特別講演会を開催
 11月17日(水)、工学部大会議室において、文部科学省科学技術・学術政策局川端和明計画官を講師に招き、「科学技術政策と大学」と題する富山大学大学院理工学研究科特別講演会を開催しました。



講演会に先立ち、川端計画官は、瀧澤学長、塩澤理事・副学長、遠藤事務局長、龍山理工学研究科長、平井理工学副研究科長から、富山大学の概要について説明を受けた後、理学部、ベンチャービジネスラボラトリー、水素同位体科学研究センター、附属図書館、地域共同研究センターを視察し、教員と懇談されました。

特別講演会で川端計画官は、文部科学省の科学技術政策に直接携わり、具体的な計画を立てる責任者である立場から、①日本が大学に寄せられる期待とは？②どのような施策があり、今後は何が行われるか？③地方大学はそれに如何に対処すべきか？について講演されました。講演会には理工学研究科教員、教育学部教員、事務局、理学部、工学部職員など多数の教職員が出席し、講演後の質疑応答においても活発な意見交換が行われました。理工学研究科では、貴重な意見や提言をもとに、今後の対処を検討し、中期目標・中期計画の実施に反映させていくことにしています。

新潟大学・長崎大学・富山大学の3大学間における教育・研究交流協定等に調印

平成16年10月25日(月)、ホテル日航新潟において新潟大学、長崎大学及び富山大学の3大学間の教育・研究交流協定並びに3大学工学部の間における単位互換に関する協定の調印式が行われました。

これは平成15年度文部科学省事業「特色ある大学教育支援プログラム(通称 特色GP)」に3大学工学部が共同申請したことを契機に、3大学間における教育・研究の連携を更に深めるとともに、学部間においても相互の交流と協力を促進し、教育内容の一層の充実を図ることにより、各大学の更なる発展を期すこととを目的に、各大学の学長及び工学部長から挨拶があった後、3大学の学長が「新潟大学、長崎大学及び富山大学との教育・研究交流協定書」に署名し、協定書と交換しました。引き続き、「新潟大学工学部 長崎大学工学部及び富山大学工学部の間における単位互換に関する協定書」とその実施要項に3工学部長が署名し、協定書を交換して、調印式を終えました。



とを目的に締結されたものです。式では仙石正和 新潟大学工学部部長から協定締結に至る経過の紹介や各大学の学長及び工学部長から挨拶があった後、3大学の学長が「新潟大学、長崎大学及び富山大学との教育・研究交流協定書」に署名し、協定書と交換しました。引き続き、「新潟大学工学部 長崎大学工学部及び富山大学工学部の間における単位互換に関する協定書」とその実施要項に3工学部長が署名し、協定書を交換して、調印式を終えました。

教職員が新潟県中越地震被災者に義援金
 11月25日、新潟県中越地震被災者への義援金として、学内教職員から募った1,256,000円を日本赤十字社富山県支部へ届けました。富山大学では地震発生直後から、水やおにぎり、カップ麺 毛布などの救援物資を送りましたが、被災にあわれた方々が大変窮乏されていることから被災見舞金として学長、理事、副学長、学部長及び事務局長が発起人となり、学内の教職員に募金を呼びかけたものです。遠藤事務局長と山崎総務部長が同支部を訪れ、「被災地の早期復旧を心から念願し、被災者の方々のために役に立ててください。」と、湯上谷同支部事務局長に義援金を手渡しました。

◆行事
平成16年度学長主催による外国人研究者及び外国人留学生との懇談会開催
 12月17日(金)、恒例の「学長主催による外国人研究者及び外国人留学生との懇談会」が大学食堂(生協食堂)において開催され、学内外関係者や本学の外国人研究者、留学生など約250人が参加しました。

富山大学親子フェスティバルを開催
 11月13日(土)、14日(日)の両日、大学開放事業の一環である一般市民向けイベント「親子フェスティバル」を開催しました。「親子フェスティバル」は、主に教育学部の学生と教員有志が企画・実施の中心となり、いろいろな遊びを通して大学を一般市民の方々に理解してもらう地域住民参加の体験型イベントとして開催しています。企画の質も年々向上し、6回目となる今回は7000人を超える方の来場を得るなど、今ではすっかり「地域の行事」として定着しています。瀧澤 弘学長、神川康子生涯学習教育研究センター副センター長、西川友之評議員からの挨拶の後、テープカットが行われ、フェスティバルが開場となりました。今年度は「遊びの王国」をメインテーマに12



この懇談会は、本学の外国人研究者、留学生及び教職員と学外関係者が一堂に会し、より一層の交流と相互理解を深めることを目的として、毎年開催されています。日頃、本学の留学生や研究者に対する支援活動をしていただいている(財)やま国際センター、富山県青船会、五福校下学生アパート組合、富山ハンドインハンド、富山大学生生活協同組合から多くの方に出席いただき、和やかな懇談会となりました。アトラクションでは、吹奏楽部による演奏、中国・韓国留学生による歌、マレーシア留学生による民族衣装を身に纏った歌と踊り、職員と留学生によるマジックショーなどが披露され、最後に参加者全員で「北国の春」と「明日があるさ」を大合唱し、盛会のうちに懇談会を終了しました。



企画を用意しました。各会場には多くの方が参加され、賑わっていました。中でも、定番となっている超・巨大迷路「ちびっ子めいろ」や「おかしなアトリエ」は長蛇の列をなす盛況ぶりでした。参加者からは、「劇が上手で、子どもも真剣に見ていました」、「内容が豊富なので、学生さんが増えたように思えた」、「子どもが学生さんと出会えて、新鮮な感じがした」という声が多数寄せられました。なお、今年10月の統合に先駆けて始めた富山医科薬科大学、高岡短期大学との共同開催も軌道に乗り、学生の意欲が続く限り、この取り組みを守り育てていくことにしています。



富山県留学生等交流推進会議が開催
 11月25日(木)、富山県留学生等交流推進会議事務局(富山大学)の平成16年度総会が、富山市内のホテルで開催されました。総会には、文部科学省高等教育局留学生支援課牛尾国際交流企画室長のほか、県下の高等教育機関、地方公共団体、経済団体及び国際交流団体の委員など40名が出席し、牛尾室長から国の留学生に係る諸施策等について説明がなされた。留学生受入れ状況の現状と諸問題等についての意見交換が行われました。

◆表彰

長谷川総一郎教授教育学部が井波町表彰を受賞
 10月29日(金)、長谷川総一郎教授(教育学部)が南砺市誕生に伴い10月を持って閉町となる井波町から、同日行われた閉町式に併せて行われた最後の井波町表彰式において芸術文化功労の表彰を受けられました。表彰は、「いなみ国際本彫刻キャンプ」など国際芸術文化交流活動をとおして、芸術文化の活性化に尽くされた功績が高く評価されたものです。

●本誌は、富大構内などで無料配布しています。郵送のご希望もお受けいたします。 ●無断転載はご遠慮ください。
 ●本誌は、年4回、3ヶ月毎に発行します。ご意見、ご要望を是非お聞かせください。 ●本誌は、古紙100%の再生紙と大豆インクを使用しています。

TOM'S Magazine 編集PJ 加藤 重広 人文学部助教授 小林 真 教育学部助教授 河野 三郎 経済学部助教授 森脇 喜紀 理学部助教授 山田 茂 工学部助教授 高井 正三 総合情報基盤センター教授 仲濱 政光 生涯学習教育研究センター講師 安念 英恵 総務部総務課長